



社団法人

海外と文化を交流する会

(社) 海外と文化を交流する会会報

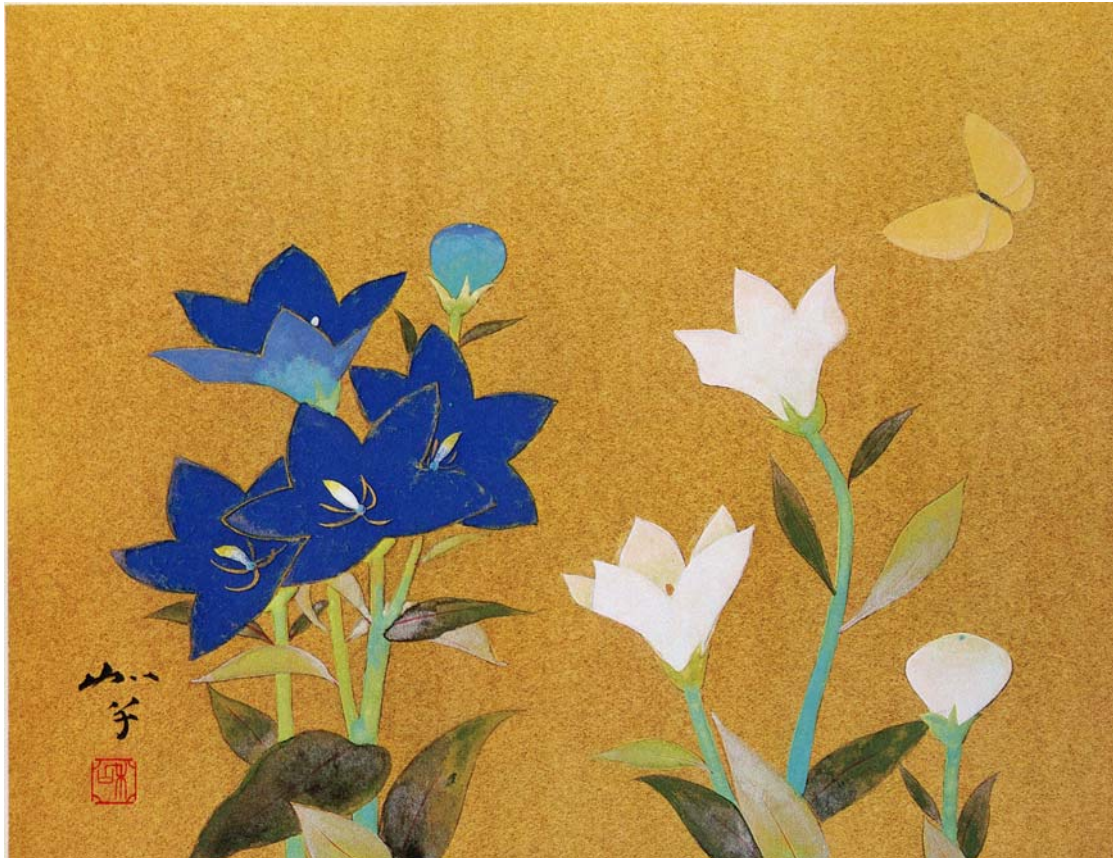
2009年10月発行(4ヵ月1回発行)

第42号

”知と心”の繋がりに文化の原点を求めて

●日本を理解し日本で学ぶ留学生への支援 ●貧しい国々での医療活動を支援

●各国大使館との協力などによる文化講演会の主催



郷倉和子 「桔 梗」

——1981年、(社)海外と文化を交流する会がニュージーランドに寄贈した日本画16点の中の作品。郷倉和子(ごうくら かずこ)は、日本画家、日本芸術院会員。日本画家郷倉千靱の長女として1914年11月、東京に生まれる。1935年女子美術専門学校日本画科卒業、1937年安田靱彦に師事、院展に出品を続け、1957年日本美術院賞、1960年院展同人、1970年院展文部大臣賞、1984年院展内閣総理大臣賞、1989年日本芸術院賞恩賜賞受賞、1997年日本芸術院会員、2002年文化功労者という画歴をもつ。父と共に花鳥画を得意とする。

随筆・寄稿

■自然学——命を考える

室井鐵衛（社）海外と文化を交流する会名誉会長

～室井鐵衛名誉会長の原稿を読んで～

室井鐵衛前会長は 90 歳になられて東京を離れ、ご親族が住む故郷、宇都宮の敷地に新たに快適なフィンランド・ハウスを建てて住んでおられます。教授生活を引退された後も、多くの教え子に慕われる先生は、ずっと勉強会、研究会を開いてこられました。宇都宮に移られても、教え子達が東京からやってきては勉強会を続けているそうですから、このことから室井先生がいかに慕われ、敬愛されているかはお分かりいただけると思います。常に世の先端を行く先生の思索生活は、衰えを見せるどころか、ますます研ぎ澄まされて健在なのは、嬉しいことです。

この度、93 歳の先生が今、最も関心を寄せておられる“自然学”の原稿が届きました。広大な宇宙の中にある人類、その存在の意味そして使命…に思いを馳せてみたくなる長文でしたが、読みやすく短くまとめて欲しいという大変難しい作業を文才のない者に任せられてしまいました。日常の煩わしさから、しばし、解き放たれ、“人はいかに生きるべきか”という原稿本来の内容を少しでもお伝え出来れば幸いに思います。（松岡裕子）

自然学——命を考える

我々、人間は人として生れ、生きて終わる。
そして色々考える、それは何か。
そもそも“人間”とは、そしてその生命は——

命とは何か。宇宙の現象の一つであり、宇宙のシステムの中にいる。そこに運命がある。運命を動かすものは、自然であり、社会でもあり、人でもあり、宇宙の原理である。宇宙の中に自由があり、自由の意味は宇宙である。

自然とは宇宙の自由な姿である。その姿をとらえる物は思想と、科学と、芸術であり、人間性そのものである。人間に宇宙がある。それは人間の脳にあるものだ。たまたま人間の脳につくられたものだが、その人間は宇宙が創ったもの。それは思考であり、感性であり、心である。何かを感じることは宇宙から暗示をもらうこと。それは人間性である。自然の姿に“美”がある。美を感じる生命に人間があり、美の原理は善であり、その原理を成り立たせるものに徳の運動がある。宇宙、自然、人間、徳、心、社会、理想の働くところに心の世界が創られる。

宇宙と人間と理想と自然と生命を学ぶことに自然学がある。

—自然学を考えてみると—

人間とは、命とは、宇宙の生命として、たまたま人間に生れただけのこと。人間に必要な人格は、感謝の念と、奉仕の気持。自然学とは、天命、その生命を生かすこと。そこに自然学の原則がある。

人間に必要な人格は、感謝の念と奉仕の気持だ。自然の姿は善である。美を感じる生命に人間があり、美の原則は善であり、その原理を成り立たせるものに徳の運動がある。

人間は生きることに可能性を見出す体力をつける。誰でもがそれぞれの生活ができる。怠けては駄目である。

今、地球の環境悪化が人間の生命を脅かしている。地球温暖化問題で、それは現代人の生活のあり方そのものに問題があるということである。温暖化の教えるものとは、2000余年の学びと反省であるべきである。

人類の脳に与えられているものは

- ① 弱い者を助ける
 - ② 能力を高める努力をする
- この2つである。

■ 「つよさ、について」

横田保恵 (社)海外と文化を交流する会会友

この詩は松岡裕子氏の画「無限の可能性を秘める幼な子」に触発されて書かれたものです。画とともにご覧いただきたいと思います。

ちいさなあなたを守るがごとく 包みこむ
おとなのわたしのこの手が いつか
あなたの重みによって ちからづけられるとき

あなたの この つよさは
いったいどこから うまれてくるのだろう

ちいさなあなたの泣き顔を そっとのぞきこむ
おとなのわたしのこの眼が いつか
あなたといっしょに 涙であふれるとき

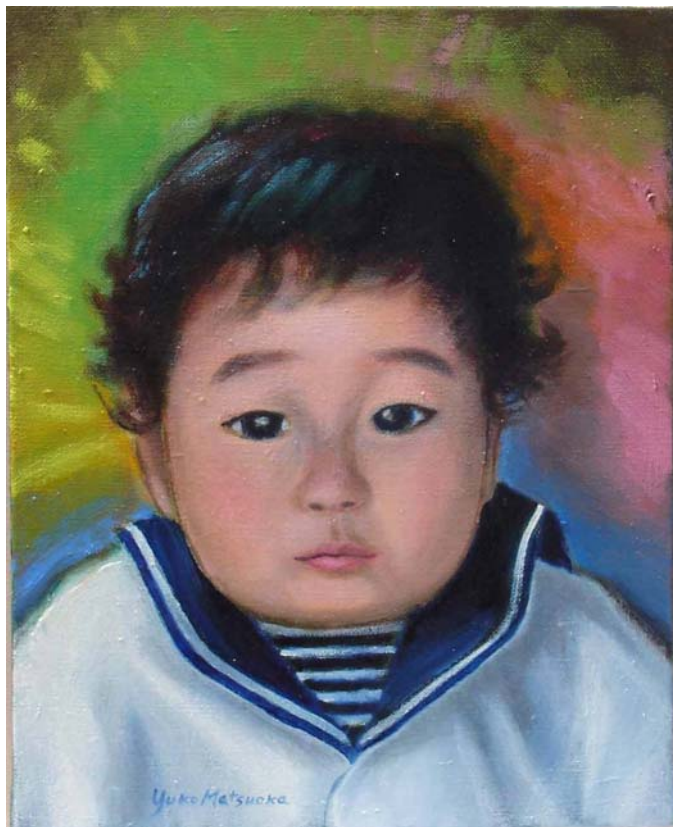
あなたの この つよさは
いったいどこから うまれてくるのだろう

ちいさなあなたの ちいさな身体
ちいさな身体の いったいどこから

つよいというのは どういうことか

守るといふのは どういうことか
守られるといふのは どういうことか
つよいといふのは どういうことか

くりかえし くりかえす 問いかけのなかで
だから わたしは まず、だきしめる
ちいさなあなたの ちいさな身体を



(松岡裕子画・無限の可能性を秘める幼な子)

■バングラデシュの医療支援に捧げておられる宮崎亮・安子医師の近況

当会は 1990 年より 2006 年に至る 17 年間、宮崎医師の活動を日本が生んだシュバ
イツァー博士と仰ぎ、応援してきました。以下、近況をお伝えします。

近 況

宮崎安子

私達は、バングラデシュの活動を開始して来年で 30 年になります。私達は、いつか年を

取ったらバングラデシュの田舎に住んで、昔のように働けないけど、私達の持っている医療的知識をもって、無理しない程度に患者さんを診察したり、治療したりを、続けようと思っていました。場所も、まだまだ開発されていない田舎のジョイランクーラにしようと思っていました。主人（亮）は79歳、私は76歳になりました。このところ体調を崩し、自分達の健康を守ることがやっとなりました。バングラデシュに行く度に体調を崩し、下痢になったり、膀胱炎になったり、感染をおこすことが多くなりました。しかし、主人は、生かされている間はバングラデシュに行きたい。日本に、そこに行ってくださいの方があれば、一緒にして働いていただいております。しかし、主人は、泌尿器科の患者さんのために働きたいとの思いは強く、いつも、外科、整形外科の先生をお連れして、バングラに行っています。その間に、100例近くの手術をして頂いております。手術の準備の忙しい中、チームの責任者として働いています。その忙しい中で、主人は泌尿器科の患者さんを診察したりしていました。十分な時間を取って、主人のために泌尿器科の診察のできる日を作りたいと思いました。そのため、5月の連休と、お盆の時を選び（この期間は高温多湿で、誰も来たがらない）泌尿器科の診療を開始しました。

現地の医師で、信州大学の泌尿器科に5年も国費留学したカレック先生は、今ではダッカ大学の教授になられて大活躍をしておられます。カレック先生が、自分で育てた、若い医師を連れて手伝いに来てくれました。バングラデシュでは珍しい、ボランティアで働いてくれています。8月も、このお二人が参加して下さることになっています。この活動が板につけば、現地の医師によって、主人の活動が受け継がれるのではないかと思うこともあります。

このところ、主人はバングラデシュに行くたびに、死ぬかもしれないと思うことに直面していますが、今も生かされています。静かに老後の時を持つことも考えられるのですが、主人は決して「然り」ではなく、バングラデシュの仕事を続けるために、与えられた「命」を使いたい。そのために健康を考え、毎日を過ごしています。主人流の健康療法、体操をしたりなど、鍛錬をしています。一時は、車椅子の生活になるほど歩行が困難になりました。足の筋肉が痙攣したり、痛みのために眠れない日が続いたり、感情の混乱があったこともありますが、今は痙攣もおさまり、痛みのために眠れないこともなくなりました。静かに神に感謝し、バングラデシュのために働く準備をいまだに着々と進めています。怠け者の私にとっては、少ししぶしぶバングラデシュ行きの準備をしています。私は骨粗鬆症のため、胸椎、腰椎の骨折、更に軽症ですが、高血圧、糖尿病、高脂血症と老化現象が進行しています。細々とした雑用は、私の手が必要となって来ました。生かされている間は、神様に感謝を捧げて、天国に入る日には娘に逢うのを喜びとしています。娘にはお詫びをしなければならない事がたくさんあります。その日まで、バングラディシュの活動を支えていきたいと思えます。

松岡 朝を検証する—— 3

（社）海外と文化を交流する会の創設者・松岡朝を検証することで、日本と世界のつな

がりを再検討できる、と考えました。前々号で大谷俊介（社）海外と文化を交流する会常務理事が紹介記事をご披露しました。続いて、前号および今号では、佐藤純一顧問が松岡女史を考察します。

■「アメリカの感情」に出会って思う（その2）

佐藤純一 海外と文化を交流する会顧問

承前——印象的な場面のいくつか

2) 渡米船太洋丸上での会話

朝子が昭和 13 年に渡米のため乗船した太洋丸の上で最初のアメリカ人との会話が、ホンコンから横浜経由で母国に帰るある大学教授との会話が本の先ず始めに掲げられている。それがアメリカに到着したらまずぶつかるであろうアメリカ人の感情を象徴的に表わすと思われる場面である。

『……「あなたは日本人ですか？支那人ですか？」とアメリカの大学教授夫人がお尋ねになりました。私は言下に「私は日本人です。これからアメリカへ教育協会の使節として参る途中でございます。」と答えました。これは太平洋丸の上の或朝の出来事で、その夫人は大変険しい顔をして「あなたは日本人ですか。それではアメリカにお出でになってもあなたを泊めるホテルは多分ないかもしれないでしょう」と申しました。

・・・・・・・・・・・・・・・・

（それに対して朝子はジョークを交えて）

「そうですか。本当に困りましたね」

（でも、大真面目に）

「もしアメリカのホテルが私を泊めて呉ないのならば、仕方がないから私は路傍（みちばた）で寝ましょう。そうすれば親切なおまわりさんが来て、私を拾い上げて呉れるでしょう。かえって無料（ただ）泊まりと食事にありつけますよ」と答えました。』

甲板の上の小さな出来事であったが、これからアメリカ渡って、かつて交流のあった人が相当いるとはいえ、当時の日本についての説いてまわろうとする旅の幕開けとしては、著者が「何とはなしに心の中に不安を感じないではいられなかった」と記しているとおり大変きついものだったろう。

この短い会話は、当時の日本に対するアメリカの一般市民の感情がいかにも表われている。何ごとも、講演会やパーティーなどでよりもごく日常的な出会いで自然に出てくれば、しぐさにこそ本当の思いがでてくるものである。これもその典型的な場面で、著書の冒頭に朝子が掲げた意が強く伝わってくる。

3) アーリントンでの祈り

滞在中のある日曜日の朝、途中の花屋でささやかな花を買って、アーリントン無名戦士の墓を訪ね、朝子の表現をそのまま借りれば、一生懸命に花を捧げて真直ぐに前進して墓前にひざまずき合掌瞑目した。そこで彼女を取り囲んだアメリカ人が何人も「サンキュー、サンキュー」と握手を求めてきたという。その場で交わされた会話を二つ掲げよう。

ある婦人の言葉である。

『「何という美しい光景でしたでしょう。日本人の拝み方を私たちは初めて見た。何という敬虔な態度でしたでしょう。あすこに坐って手を合わせて拝む。無名戦士はここに今日お参りに来た戦死者を持つ金星の母親達が（ゴールド・スター・マザー）が皆自分の息子だと思っているのです。そのお墓にあなたは花を捧げる。私はここから三十哩先の学校の先生です。明日は学校に行ってこの話を生徒に聞かせましたらどんなに喜ぶでしょう。」』

また一人の老人は、

『「日本から来た学校の先生が無名戦士のお墓に心から花束をお挙げになるというのに、私たちアメリカ人は今まで日本を憎んで居りました。皆、誤解でした。新聞に日本人が弱い支那人を虐めていると毎日書いてあるので日本人は人道の敵として憎んでおりましたが、今あなたが花を捧げて拜んで居るのを見ると、やはり西も東も人情に変わりはない。……私もうちへ帰ったら、このことをよく話して聞かせましょう。皆は本当に目が覚めたような気がするでしょう。」』

そしてその場面を「親善ということは理屈でなしに心と心が邪曲なく触れ合うこと」と結んでいる。

3 著書の現代的意義を思う

ここで、我々の会の創設者である朝子の著書が見つかって刊行時代の日米の市民レベルの心の琴線に触れる交流を知るにあたって、今でもあるいは今だからこそ活かせるその現代的意義を私なりに考えてみたい。

その前にもう一度、なぜ言論統制、検閲が厳しくなっていく時期にこのような日米の絆の深さを、しかもルーズベルト大統領夫人の書名写真つきで出版が叶ったのかである。それは何より公式というか、表向きは当時の外務省の意を受けた教育協会のミッションということで、日本の考え方を訴えにまわった際にまとめたということがあげられよう。朝子の日本の当時の中国への対応に対する説明は、当時の日本の完全な情報統制の中で共通の見解であって、そのままアメリカで話してアメリカでの認識との違いに触れて、逆にまだ日本は十分な真実の宣伝がないということを反省したとのページが、当時の日本では典型的な愛国の書として受け取られ、むしろこの著書の真価があると評価されるアメリカ人、日本人の人間としての交流が行われたことを伝えるページがそっくりそのまま日本で通ってしまったことが幸運でもあり天佑でもあると私は思う。そしてそのことがこの本を現在でも通用する示唆に富んだものになっていると思う。

たとえばこれが『アメリカ人の感情』というタイトルで、戦時中の日本人読者にむけられていることに大変な意味があると私は思う。当時の朝子が、日本の中国政策の日本の公式見解を信じて、強い反論を受けながらも説いて、反論があっても逃げずに持説を述べて議論したりする一方、お花やお茶の会などの日本文化を美しいしぐさで紹介しながら交流を行えたりしたことを紹介して、アメリカ人はまだ日本人と心が通じるということを当時の読者に訴えたところは貴重なものであった。私には、朝子の心の奥に若いころ勉学の機会と友人、知人を得たアメリカとの関係の絆をつなごうという気持ちが、いわば本能的、潜在的に働いたのではないかと思われてならない。

こういった絆があったことが、第二次大戦敗戦後アメリカが戦勝国として敗戦国への隷属的支配政策を採らずに、やがて日本を最大の経済、文化のパートナーとして蘇えらせるのに、

冷戦構造という歴史的状況が幸いしたとしても大きなちからになったと言えるのではないか。

そして朝子が、戦後いち早く海外との文化交流をとおして諸国民との心の絆のネットワークづくりをはかるべく我々の協会をスタートさせたのも、この著書で語られた文化交流をふまえた人間同士の絆の大切さの故であろう。我々がこれから新たに当会の活動を地球時代に向けて再挑戦することが、この著書との出会いに応えることだと思う。

お知らせ & 報告

■コンサートのお知らせ

——陣内大蔵と楽しいコンサート——

恒例の「海外と文化を交流する会チャリティコンサート」は、次のように決まりました。楽しみにご参加いただきたいと思います。

☆歌手の紹介：陣内大蔵（じんのうち たいぞう、1965年5月25日）

日本のシンガーソングライター、音楽プロデューサー、日本基督教団東美教会伝道師。関西学院大学神学部除籍（1992年）。日本聖書神学校卒（2007年）。山口県宇部市の緑橋教会の生まれでプロテスタント系のクリスチャン。

1988年、『いと小さき君の為に』、『Moratorium』でデビュー。デビュー時のキャッチコピーは、「許してほしい…夜になると、僕は偽善者になれないんだ。」だった。1989年に香港の歌手、張立基歌う「夜消沈」が香港で大ヒット。以降、主に東南アジアの国々で陣内の曲がカバーされ続けている。

1990年に香港コロシウム音楽祭で日本人最優秀アーティスト賞を受賞。1991～1994年に「空よ」「心の扉」「僕は風 君は空」がスマッシュ・ヒット。2001年夏～2004年は斉藤ノブをリーダーとする「Vibes」のボーカルとして活動。2004年4月～2006年3月には横浜ミュージックスクールでボーカル専属講師。近年はライフワークとして「チャーチコンサート」を日本各地の教会で行っている。2007年6月17日、東美教会（吉祥寺）伝道師に就任。

☆日時：2010年3月26日（金曜日） 18:00～21:00

☆場所：東京赤坂・霊南坂教会

☆会費：当日 3500円 前売り 3000円

■「つどい」企画

会員の交流促進のための「つどい」をひらきたいと考えています。

次期は2010年の5～6月。場所もふくめて、どんな会合にするか、鋭意企画中です。どうかご期待ください。

■会員の募集

海外と文化を交流する会は、すでに 40 周年をすぎました。ここまで、ずっと続けてきたのは、会員の皆さまのバックアップがあるからです。御礼申し上げます。

会としてさらにボランティアでの有意義な活動をしていきたい、そんな願いをこめて、常に企画を検討しています。

幸いに良質な会員の方々ばかりです。さらなる発展を期待し、新会員をご推薦ください。自薦の場合でも、理事会で面接いたします。事務局までファクスあるいは e-mail でお問い合わせください。

■会費納入のお願い

2009 年度の年会費納入をお願いいたします。さらに 2008 年度 2007 年度の年会費未納の方は、ぜひともご納入ください。高く評価されている当会の活動は、皆さまのご支援あってこそなのです。

将来、日豪両国の芸術専攻生の教育交流にも発展させたいと考えています。オーストラリアやニュージーランドに寄贈日本画の里帰り展も実現したいと思います。ぜひご支援ください。

郵便振替 00130-2-366249 社団法人海外と文化を交流する会
銀行振込 三菱東京 UFJ 銀行渋谷支店（普）2266599 海外と文化を交流する会

会費 10,000 円（正会員） 5,000 円（特別賛助会員） 3,000 円（学生会員）

海外と文化を交流する会事務局
〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-27-6 パインビル内
TEL&FAX 03-3370-7654 e-mail:jimukyoku@kaigai-bunka.org
<http://www.kaigai-bunka.org>